きみのクロ

ヒトリネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
きみのクロ

【Ｎコード】
Ｎ７４８７Ｆ

【作者名】
ヒトリネコ

【あらすじ】
少年は恋をした。でも、それはきっと叶わないモノ。そんなある日、少年は朝目が覚めると、猫になってしまっていた。しかも、好きな女の子に拾われ、ペットとして暮らすことに。これは、少年の不思議な恋の物語。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ：【おれとおまえ】（前書き）

またしても新作です。
十話もいかないと思いますが、これを読んで少しでも感動してくれれば、僕もうれしいです＾＾；
ぜひ、こちらも読んでみてくださいｍ（＿＿）ｍ

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ：【おれとおまえ】

朝、窓から射しこんでくる陽の光で、目が覚める。
ゆっくり体を起こし、一つ大きな欠伸をした。
俺は時計を見てギョッとする。
「げっ、遅刻！？」
慌てて制服に着替え、かばんを手に持ち、家をとびだした。

俺が通っている高校は、家に結構近い。
しかし、なぜか寝坊も多い。
つまり、俺はギリギリ遅刻の常習犯なわけだ。
よくクラス委員長とかに、ひどく怒られる。
その時、いつも俺に声をかけてくるやつがいた。
そいつの名前は【柊（ひいらぎ）　美琴（みこと）】。
何考えてるのか、よくわからないやつ。
でも、結構優しかったりする。
いつも、怒られて疲れた俺に、励ましの声をかけてくれるいいやつだ。
そんなことを考えたら、少し耳が熱くなったように感じた。
走っているせいだ、と俺は解釈をしたが、実際はよくわからない。
詳しく考える時間がないから、今走っているのだから。
と、ようやく校門が見えてきた。

「おーい！！もうすぐで予鈴鳴っちまうぞー！！」
校門の向こうから、教師が声をかけてきた。

意外に今日は、間に合うかもしれない。
「どうもっす」
俺はそう短く挨拶をして、通り過ぎていった。
大急ぎで靴を履き替え、階段を駆け上がっていく。
だんだん息が切れてきた。
自分の体力の無さを、毎日のように感じながらも、教室の前までやってきた。
力一杯にドアを開いた。
「ぎりぎりセーッフ！！」
この時、一気に力が抜けていくのを感じた。
今日はぎりぎり遅刻しなかったから、良いことがあるかもしれない。
そんなことを考えながらも、教室の床に座り込んでいた。
ふと、二人の女子が、俺に声をかけてきた。
「へぇ～、今日はよく遅刻しなかったわね。褒めてあげる」
「すごいすごい、ナイスファイト！！」
「お、お前らなぁ・・・」
息苦しくも、かすれた声で返事をして、顔を上げると、いつものようにクラス委員長こと【柏木（かしわぎ）　智実（ともみ）】と柊がいた。
クラス委員長は、俺の頭をポンポンと撫でるように叩くと、自分の席に戻っていった。
柊は、俺の横に座わりこむと、いつものように声をかけてきた。
「おつかれさま。大丈夫？」
「あ、あぁ・・・わりぃ、な・・・」
俺はハァハァと息を切らし俯いていると、予鈴が鳴った。
柊はクスっと笑う。
「な、何だよ・・・？」
苦しそうに俺が聞くと、彼女は笑顔で答えた。
「結構、余裕だったね？さっすが！！」
俺は彼女の笑顔を直視できなかった。
というよりも、疲れきっていて顔をあげることすらできなかった。

「さっ、席に戻ろ？」
彼女は立ち上がり、手を差し出してきた。
俺は思わず息を呑んだ。
「じ、自分で立てるから」
そう言って、俺は窓際の自分の席に向かう。
窓際とは、なかなか悪くない席だ。
おさまりかけていた鼓動が、また高鳴りだすのを感じた。
胸に手をあて、落ち着いて、鼓動が静まるのを待っていた。
そんな時、ふと後ろから声をかけてきた。
「ねぇ、何してんの？」
「な、何でもない！！」
驚き混じりの返事を返した。
そう・・・柊は俺の席の後ろなのだ。
しかも、前の席では、さきほどのクラス委員長が目を光らせている。
何とも危険な席の配置なんだろうか、と改めて落胆していると、右隣の男子生徒が声をかけてきた。
「お前、よく生きてるよな」
「言うな」
彼の名は【桜庭（さくらば）　音駆（ねく）】。
ずいぶん変わった名前だが、意外に中身は普通。
運動神経も結構人並みだが、唯一音楽のセンスはズバぬけている。
その名の通り、“音を駆ける少年”になったわけだ。
最近、俺はこいつと仲が良い。
と、そんな説明をしていると、音駆は耳打ちをしてきた。
「お前ら、雰囲気いい感じじゃんか。お前もビビッてないで、もうそろそろ――――」
「うっせーよ」
彼の言葉を遮るように、俺は言い放った。
音駆は、俺の好きな人を知っている唯一の親友だった。
しかし、それでも俺はあの言葉の続きが、どうして聞きたくなかっ

た。
だから、俺は遮った。
俺は知ってたから・・・だから、遮った。
彼女はあの時言っていたから・・・。

たまたま下校のとき、柊と鉢合わせになった時のことだった。
「ねぇ、あのさ・・・好きな人、とかっている？」
「えっ！？お、俺は・・・」
俺は答えるのに困った時、彼女ははっきりと言った。
「ウチはいるよ」
思わず俺は「えっ」と、固まってしまった。
「その人は、全然ウチの気持ちわかってくれないんだ。ホント」
「そう、なのか・・・」
喉に何かが詰まり、声が出なかった。
俺が隠してきたモノの存在は無意味だったんじゃないか、そう思うくらい俺にとって衝撃的だった。
「それでさ、いるの？いないの？」
突然、彼女はさっきの質問に戻った。
俺は俯き、声を絞り出した。
「・・・いたよ」

気づいたその時には、俺は眠っていた。
机に顔を伏せた体勢で、すっかり爆睡してしまっていた。
顔を上げると、国語の教師が黒板に淡々と文字を書き続けていた。
背中につんつんと何かを感じた。
ゆっくりと振り返る。

すると、柊は頬を膨らませ、俺を睨みつけていた。
「寝るなっ」
彼女は小声でそういうと、適当にそれに答える。
「もう寝てない」
「じゃあ、無視しないのっ」
「はいはい」
「・・・・」
「・・・・」
会話が終了したようなので、先生に怒られる前に、顔を黒板の方に向けた。
しかし、授業をまともに受ける気にもならなかったので、窓の外を眺めてボーッとすることにした。
静かな風が吹き、雲が空に浮いていた。
ふと、外に小さな鳥が過ぎった。
木が風に揺れて、かさかさと音をたてている。
俺はふと見た、さっきの“夢”を忘れようとしていた。
そんな時、チャイムが鳴り、授業は終わった。

放課後、俺は足早となり、さっさと下校した。
そんな時、一匹の茶色の毛をした猫が、日向ぼっこをしていた。
俺は、夕方に日向ぼっこなんて変な猫だな、と視線を猫に向けながら、歩いていた。
そんな時、後ろから何かが走ってくる気配を感じた。
俺はゆっくりと振り返る。
柊だ。
彼女が何かに向かって走ってきてる。
どうやら、猫のようだった。
「かわいいー！！」

柊は猫が大好きのようだった。
しかし、猛スピードで迫ってくる彼女に、猫は驚いて逃げてしまった。
その様子に、柊は小さくため息をついて、下校中の生徒の中に紛れた。
俺もそれを見届けた後、背を向け歩き出した。
しかし、声をかけられてしまった。
「おーい！！」
またしても、柊だった。
とにかく俺は、俺のことじゃないと思い込み、振り返らず気にせず歩いた。
・・・が、そこまでだった。
「ちょっと待ってくれてもいいじゃない。ウチも猫に逃げられて、結構落ち込んでたんだからね」
「その割りには元気だな」
「もっちろん！！だって・・・猫見れたし」
俺はふと思う。
今の間は何だったんだ、というか猫で落ち込んでたんじゃないのか？
思わず、呆れてため息がこぼれた。
しかし、柊はその様子を気にせず、真剣な面持ちで話し始めた。
「ねぇ、ウチの好きな人・・・誰だと思う？」
「・・・さぁ？」
何となく、数人心当たりはあったが、答えたくなかった。
正解してしまった俺は、嬉しいことなど何もないから。
むしろ、適当に誤魔化すほうが、俺にとって良かった気がした。
「わかってよぉ～」
「・・・何でさ？」
「それは・・・相談に乗ってほしいからなの」
俺は声が出なかった。
急に胸が痛くなり、心の奥のモノが溢れてきそうになった。

俺はその時、頭が真っ白になり、その場から逃げ出してしまった。
柊は俺に、何か言っていたような気がしたけど、もう何も聞こえなかった・・・聞きたくなかった。
俺は逃げた。
その場から、できるだけ早く・・・。
気づくと俺は、膝に手をつき、玄関の前で息を荒くしていた。
俺は一回深呼吸をしてから、玄関のドアノブに手をかけ、家に入った。

部屋に戻ると、急に疲れと眠気が俺を襲った。
俺は倒れ込むように、ベッドに入った。
それから眠るまで、そんなに時間はかからず、深く眠りの中に入っていった。
俺はもう、何もかもが嫌になった。
ただ一つ、俺は願い続けた。

「・・・お前のそばに・・・いつまでもいたい・・・」

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ：【おれとおまえ】（後書き）

修正多くてすいません＾＾；

1day：【おれはクロ】

朝、眩しく射しこむ陽の光で目が覚めた。
両手両足を伸ばし、大きな欠伸をする。
ふと、俺は耳をすませた。
―――声が聞こえた・・・しかも大勢・・・。
俺はボーッとした意識の中、周りを見回す。
すると、通り過ぎていく人の足が見えた。外の景色も見えた。
―――ここは、どこだろう？
違和感を感じた。
俺は、立ち上がりまた一つ欠伸をした。
そして、また見回す。
何か地面が近い。人が大きい。世界が広い。
俺はとりあえず、周辺の詮索を始めた。
しかし、ここはよく見れば見覚えがあった。
俺が通う高校の校門前だった。
どうりで声がするわけだ、と俺は納得した。
けど、もっと早く気づくべきことがあった。
―――なんでこんな場所で寝てたんだ？
俺は考えに考えたあげく、とりあえず家に帰ることにした。
かばんが無くては、学校にいても意味がない。
俺は走った。
何か、速かった。
足を見てみた。
けど、手があった。というよりは、前足？
後ろを見ると、黒い尻尾が・・・しかも体まで黒い・・・。
俺は焦って、どっかの店の硝子（ガラス）を探した。
そして、ついに自分の姿を目の当たりにした。
硝子の向こうで、黒猫が俺を見つめていた。

ここで確信した。
―――俺・・・猫になってる！？
しばらくパニクって走り回っていた。
走って、走って、走って・・・。
そして気づくと、また高校の校門前にいた。
あれだけ走り回ったと言うのに、さほど息が切れていないのは猫の特権なのだろうかと、少し誇らしくなった。
俺は夢だと思い、また眠ることにした。
これもまた普段と違って、いつもよりぐっすりと眠れた。
俺はしばらく眠り続けていた。
早く夢から覚めることを願いながら・・・。

「わぁー！！黒猫さんだ！！」
「やめなって・・・不吉だよ」
「えー、そんなことないよ？可愛いよぉ」
―――せっかく眠ってるのにうるさいな・・・。
そんなことを思いながら、ゆっくりと目を開けた。
すると、俺の体を持ち上げようとする手が見えた。
俺は驚き、逃げ出した。
「ちょ、ちょっとー！！」
ふと、俺はその声に足を止めた。
ゆっくりと振り返る。
またしても、柊だった。
その後ろには、クラス委員長も見えた。
柊は、俺に向かって走ってきた。
彼女は俺の目の前まで来ると、しゃがみこんで俺の頭を撫で始めた。
嫌な感じは・・・しなかった。
「ほらね？可愛いでしょ？」

「可愛いのと、不吉は別々じゃないの？」
すると、柊は俺を持ち上げて、クラス委員長に突き出した。
「不吉なんて、この子がかわいそうでしょ！！」
クラス委員長の目の前に突き出された俺は、あまりの近さに驚き、思わず引っ掻いてしまった。
すると、クラス委員長は怒ったのか、うがぁーっと怒鳴りだす。
そんな俺を、柊は優しく抱いてくれた。
「引っ掻いちゃダメだよ。わかった？」
俺はいつもどおり返事をしようとしたが、声が出なかった。
喉がゴロゴロと鳴って、鳴き声がこぼれた。
まぁ、猫だからだと思う。
俺が返事をしたのが嬉しかったのか、柊はキャーと興奮していて、俺をなかなか解放しようしなかった。
少し、恥ずかしい気もした。
でも、その腕の中は温かくて、とても優しくて、心地よかった。
柊は、しばらく俺を抱いていると、そのうち俺を地面に戻した。
そして、「そろそろ教室に行こっか？」とクラス委員長に言って、俺に「じゃね」と手を振り、歩いていった。
その時、「あの猫可愛かったね？」と話しているのが聞こえて、少し照れくさくなった。
が、クラス委員長はそれに比べ、「次こそやってやるんだから」と拳を握り締めていたことに、巨大な恐怖を感じた。
小さなため息がこぼれた。

放課後、俺は柊がまた来るのを信じて待っていた。
そんな時、俺はふと思った。
———俺は今、この世界で猫となっているけど、本当の俺はどうなったんだろう？

俺はそれを考えていたが、そんなことすぐにわかる。
柊たちが来れば、いろいろわかると思うから。
それにしても、猫になると本当に暇だった。
――こんなにのんびりしてられるのも、人じゃなくなったからできたことなんだな。
そんなことを思いながら、一つ大きな欠伸をして丸くなった。
――というか、俺はこんな大変なことになっているのに、どうしてこんなのんびりしてるのだろうか。
顔をゆっくりと上げて、空を見上げた。
風が静かに吹き抜けている。
雲が空で揺れている。
ふと思う。
――・・・寒っ・・・。
クシュッと小さなくしゃみが出た。
それをした俺自身が、結構驚いた。
猫のくしゃみを生まれて初めて聞いたからだ。
俺は不思議な気分になった。
ここは夢の世界なのか、それとも俺が本当に猫になったのか。
今の俺に、確認する術はなかった。
ふと、数人の生徒が下校していくのが見えた。
――そろそろ来るか？
そんなことを考えながら、俺は少しの間身構えていた。
クラス委員長に襲われないように・・・。
そんな時、二人の女子生徒が出てきた。
――間違いない・・・柊たちだ・・・。
どちらに襲われても、おかしくない状況。
だと思っていたが、様子がおかしい。
どうやら、柊が落ち込んでいるようだ。
――何があったんだろう？
二人の話し声に耳を傾ける。

「“りょう”のことなら、大丈夫だよ。私の鉄拳の五発分の強度はあるから」
「そ、そうだよね・・・」
“りょう”というのは俺の名前で、本名は【黒澤（くろさわ） 陵（りょう）】。
というか、クラス委員長の鉄拳は冗談抜きでシャレにならない。
五発分の強度があると言われたが、その時は正直、骨が逝ったかと思ったほどの激痛だった。
―――・・・というか、柊！！納得するな！！
と、声にも出ないので、心の中で一人、ツッコミを入れていると、俺に気づいた柊は、何事もなかったかのように駆け寄ってきた。
そして、俺を抱き上げた。
「わぁー！！絶対ウチに懐いてるよ、この子。だって、待っててくれたんだよ？」
「へぇ～・・・私たちを待ってるとはねぇ・・・いい根性じゃないの」
そう言って、クラス委員長は拳をカキコキと鳴らした。
俺はその音に驚き、思わず柊に抱きついてしまった。
すると、柊は「キャー！！怯えてるー！！可愛いー！！」と、俺を抱き返した。
クラス委員長は、チッと舌打ちをして、拳の力を解いた。
柊は突然、俺の顔を見て、宣言した。
「決めたっ！！ウチがこの子の面倒を見る！！」
「・・・でも、美琴って、猫に好かれてないじゃない」
クラス委員長は、呆れたような口調でそう言うと、柊は自信を持ってはっきりと言った。
「この子なら、きっとウチを好きになってくれるよ」
その声は、いつもと変わらず明るみを保っていた。
俺は思わず、明るい彼女の顔に見とれていた。
すると、柊は俺を見て、微笑んでくれた。
俺は喉をゴロゴロと鳴らした。

柊は俺を抱いたまま、クラス委員長と一緒に歩き出す。
その間、俺は彼女の腕の中で、寝息をたてていた。
とても静かで、温かかった。
このまま時間が止まってしまえばいいのに、と思ったほどに心地よかった。
いつまでも、近くで彼女の笑顔を見ていたい、そう思った。
ふと、ブルッと体が少し振るえ、思わずクシャミが出た。
二人の女の子の笑い声が、聞こえた気がした。

何だか、地面がふわふわしていた。
それにとても暖かい。
俺はゆっくり目を開いた。
すると、いかにも女の子の部屋という場所にいた。
顔を上げ、辺りを見回した。
可愛らしいぬいぐるみが、そばに置いてあり、部屋の中心に丸い小さなちゃぶ台が置いてある。
俺はどうやら、彼女のベッドの上で丸くなっていたようだ。
ふと、鼻にフワッと甘い石鹸の匂いがした。
これが柊の匂いなのか、と俺は解釈した。
一つ大きな欠伸をすると、ふとゴロゴロと鳴き声がこぼれた。
すると、ドアから柊が入ってきた。
「起きた？気持ち良さそうに寝てたね」
彼女は、そう嬉しそうに言った。
俺はベッドから降りて、柊の足元にやってきた。
やはりでかい。
五感がおかしくなりそうだった。
彼女は俺を抱き上げると、俺の顔を見て首をかしげた。
「何て名前にしようかな・・・？」

しばらくそのままで、彼女はうーんと唸っている。
俺は鼻が痒くなり、前足で不器用そうに鼻を掻いた。
柊はそれを見て、クスッと笑った。
そして、言う。
「そうだ。“クロ”にしよっと。どうかな？」
彼女は俺に問いかける。
俺は「あぁ」と言うするつもりで、鳴き声を出した。
すると、嬉しそうに俺の名前を呼びなおした。
「じゃあ、決まりね？クロ」
俺は返事をした。
すると、彼女はクスッと、嬉しそうに笑った。
柊はベッドに寝転がると、俺を彼女のそばにゆっくり置いた。
俺はそこで丸くなると、柊は俺の黒い毛を優しく撫ではじめた。
俺は彼女の温もりに誘われて、静かな寝息をたてて、だんだん眠っていく。
俺が寝ているここは、俺だけの暖かな場所となっていた。
ふと、小さな欠伸がもれた。
ゴロゴロと鳴くと、喉が薄っすらと乾き、心がほんのり潤った。
そんな気がした。

2day:【かなしい背中】

朝陽に誘われて、俺はゆっくりと目を開く。
目の前には、可愛らしい少女の顔が、すぅすぅと寝息をたてていた。
俺は大きな欠伸をしてから、立ち上がり、体を振るわせた。
視線を窓の外に向けると、眩しい景色が目に映る。
俺はもう一眠りしようと、顔を伏せ、目を閉じた。
夢に誘われていく・・・その時だった。
ジリリリリリリッ！！！
突然、鳴り出す目覚まし時計。
あまりにうるさく、俺は驚き、体をビクリと反応させた。
こんなに大きな音の目覚まし時計に、少し苛立ちを募らせた。
そんな時、俺はふと彼女に視線を向けた。
さきほどの寝息が聞こえてくる。
――・・・ノーリアクション・・・。
目覚ましは一体、何の意味があるのだろう、と思いながらも、小さな鳴き声で彼女のことを呼び続けた。
すると、あんな大きな目覚ましでも起きなかった彼女は、ゆっくりと目を開く。
俺の顔を見ると、寝ぼけたような声で、頭を撫でながら話しかけてきた。
「お～はよぅ～・・・クぅ～ロぉ～・・・うゅ～・・・」
柊はそう言うと、ふらりと体を起こし、大きな欠伸をした。
そして、ふらりと立ち上がり、ふらつきながらも制服に着替えを始めた。
――・・・！？
彼女は服を脱ごうとしている。
俺は今、猫だ。
しかし、同級生の男子生徒でもある。

俺は元人間で、柊の・・・友達だ。
―――のぞきは・・・駄目だよな。
多少の迷いはあったが、ベッドの上で背を向け、俺は丸くなった。
柊は俺を気にするはずもなかったが、俺は柊を気にしてしょうがなかった。
俺は小さなため息をついた。

柊は朝食を簡単に済ませると、かばんを持って靴を履いた。
俺は彼女の足元で、座っていた。
すると、柊は俺の頭を撫でながら話しかけた。
「んー、どうしたの？クロも学校行くの？」
俺は返事のつもりで鳴いた。
すると、柊は「うーん」と考え込む。
「学校に猫を連れてっちゃ、智実に怒られちゃうしな～」
―――・・・確かに俺も困る。
お互いに言葉の通じない、二人の脳内会議が数秒の間、開かれていた。

「おっはよー！！智実ー！！」
「おはよう、美琴・・・どうするのよ、それ？」
「いいじゃんよー、教室に連れてくわけじゃないんだし」
結局、俺は柊についていくことにした。
柊の中では、一応校門までということらしい。
無論、俺もそのつもりだが。
とりあえず、俺は柊の足元について歩いていた。
二人が楽しそうに話しているのを、俺は彼女の足元で見ていた。

柊とクラス委員長は、なぜかいつも仲良い。
なぜか、二人はいつも一緒で、いつも二人に俺はいじられていた。
二人の性格から、俺はまさに“飴と鞭”とはこういうものだと、身をもって実感していた。
歩きながら、ふと欠伸がこぼれた。
すると、その様子を見ていた柊は、クスッと微笑んだ。
隣を歩いているクラス委員長は、何となく怒っているような気もした。
そんな鬼(かのじょ)はスルーして、俺は柊の笑顔に対し、鳴き返した。
すると、彼女は嬉しそうに俺を抱き上げる。
そして、そのままギュッと抱きしめた。
「うぅー！！可愛いー！！」
「そんなことしてないで、さっさと行こ？」
クラス委員長がそう言うと、柊は「あ、うん」と返事をかえし、俺をゆっくりと床に下ろした。
「じゃあ、学校行ってくるからね」
俺は喉をゴロゴロと鳴らし、返事をかえした。
彼女はクラス委員長と一緒に、校門をぬけ、校舎の中へと入っていった。
俺は陽だまりの中で丸くなり、小さな欠伸をした。

『ちょっと、そこのアンタ。起きなさいヨ』
俺は眠ってしまったらしく、誰かに声をかけられていた。
顔だけ起こし、声のするほうへ向いた。
すると、一匹の茶猫が俺を見ていた。
『アンタ、見かけない顔ネェ？』
俺は固まったまま、それを見ていた。
――――なんだ、これ・・・？

とりあえず、言いたいことを意識して、鳴いてみた。
『青パジャマ、赤パジャマ、黄マジャマ』
『何噛んでんのサ？頭大丈夫？』
――話せんのか・・・猫と・・・。
俺は小さなため息をこぼし、また眠ろうと顔をふせた。
すると、突然、体に痛みがはしり、飛び起きた。
猫パンチを食らったようだ。
『痛ぇな。何すんだよ？』
『アタイが話しかけてやってんのに、無視とは何事ヨ？』
こいつはどうやら、猫の世界では御偉いらしい。
俺は小さな欠伸をしながら、体を起こすと、そいつは俺の顔をジッと見つめだした。
そして、そいつはフッと笑った・・・気がした。
『アンタ、けっこういいオスじゃないカ』
――そんなの嬉しくもない・・・。
とか、心の中で思いながらも、あえて声には出さないでおく。
どうやら、このいかにも姉御系のこいつは俺にいろいろと教えてくれるらしい。
『アタイのことは【エリー】と呼びナ』
それが説明の第一声だった。
それに続き、この街について・・・は長いので、省略しておく。
とりあえず、このエリーという猫に会ってしまったら、挨拶しておくこと。
それは守らなくてはならないらしい。
『あとは、何か手伝ってほしいことがあったら、アタイを呼びナ。助けてやるからサ』
『あ、あぁ・・・』
そういうと、そいつは俺に背を向け、歩いていった。
最後に少し振り返ると、一言こう言い残していった。
『アンタ・・・気に入ったヨ』

――――・・・は？
猫に気に入られても、俺は人だということをわかってもらいたかった。
しかし、それを言ったところで信じる人、いや猫すらいないだろう。
まぁ、助けてくれるらしいから、俺はもう別に何でもよかった。
機会があれば話してみようと、俺は思いながら大きな欠伸をして、日向で丸くなった。

とても心地よい温もりを感じる。
目が覚めそうになったが、それに誘われるように、また夢へと戻されていった。
その間際、小さな欠伸をして、眠っていった。

俺は病院のある一室にいた。
誰かが椅子に座っている後ろ姿が見えた。
その背中は、非常に冷たく、悲しそうに見えた気がした。
ふと、背中の向こうに、誰かがベッドで寝ているように見えた。
この悲しい背中の持ち主は、その人の手を掴んでいるようだった。
それを見ていた俺は、急に胸が苦しくなった。
何かがモヤモヤとうごめいている嫌な感触。
猫なのに、ふと冷や汗を掻いた気がした。
俺の喉から、何かがこみ上げてきた。
それを一気に、俺は吐き出した。
一匹の猫の鳴き声が、病院の廊下に轟いた。

さきほどの心地よい温もりから、勢いよく慌てるように飛び起き、少し距離をとった。
そして、喉をゴロゴロと鳴らし、威嚇した。
「どうしたの？怖い夢でも見たの？」
その温もりは、俺にそっと問いかける。
俺は冷静に辺りを見回した。
すると、そこは柊の家の玄関だった。
柊はしゃがみ込んで、俺を再び抱きかかえた。
「もう大丈夫。ウチが一緒だから、ね？」
――・・・あぁ、何だろう・・・とても温かい・・・。
俺は優しく鳴いた。
すると、彼女は嬉しそうに微笑んだ。
今、俺はとても満たされていた。
これ以上を望まない。
ただ、こうしていられればいい。
柊の腕に抱かれて、俺は彼女の部屋へと向かった。
部屋の中に入ると、俺はベッドへゆっくりと降ろされた。
そして、またしても、ある意味修羅場が訪れた。
「ふぅ～、疲れたぁ～」
そういうと、彼女は制服を脱ぎだした。
俺はとっさに丸くなり、力強く目を瞑る。
――はやく寝てしまえ・・・。
ここで、あることに気づく。
――・・・ね、猫なのに・・・寝すぎて寝れない・・・。
喉をゴロゴロと鳴らしながら、唸っていた。
すると突然、彼女もベッドに横たわり、盲目の俺を抱きしめた。
彼女の温もりは、服を着ているのかどうかの判断を狂わせ、俺を誘惑する。
俺は意を決して、距離をとって目を開いた。

すると、普通にパジャマ姿だった。
ここでやっと一安心した俺は、小さなため息をついてから、ベッドの上に戻り、彼女の側で丸くなった。
俺の黒毛が優しく撫でられると、ふとゴロゴロと鳴き声がこぼれた。
柊はクスッと笑い、そのまま静かに寝息をたてはじめた。
俺もそれに誘われるよう、夢の中へと入っていく。
こんな心地良い中で、俺は再びあの夢を見ることになるなど、思いもしなかった・・・。

・・・なぜ悲しいのかもわからない・・・夢(あくむ)を・・・。

2day:【かなしい背中】（後書き）

ここらへんから、ややシリアスな感じになってきました。
僕の小説ではお決まりとも言える“夢”。
この作品は、結構期待できると思いますので、是非最後までご覧ください。

3day:【陽だまり】

朝、柊は何やら張り切っていた。
お気に入りの服を着て、お気に入りの帽子を被り、お気に入りのポシェットを肩にかけ・・・。
そして、鏡の前で最終確認。
「うん、ばっちし！」
柊はそう言って頷くと、お気に入りの靴を履いて、俺のほうに振り返った。
「クロ～、おいで～」
俺はその声に誘われるように、彼女の足元までやってきた。
すると、柊は俺をふわりと抱き上げ、ポシェットの中に入れた。
中は結構暖かく、寝心地がよさそうだった。
起きたばかりなのに、寝足りないのか、大きな欠伸がでた。
そのまま温かな眠気に誘われる。
柊は俺を入れたポシェットを揺らし、家を出て行った。

「ふ～ん、ふふ～ん♪」
柊は鼻歌を鳴らしながら、上機嫌に歩いていた。
俺はポシェットから首だけ出して、流れる風景を眺めていた。
ふと、柊は俺に話しかけてきた。
「ねぇ、クロ～？今日はどこに行くんだと思う～？」
何となく、柊は空を飛んでいるような気分なのだと、俺は思った。
とりあえず、喉を鳴らして、適当に答える。
「だよね～、わかんないよね～」
無論、俺は特に何も言っていない。
言葉の壁というのを、さり気なく感じた。

「今日はね～、“デート”なんだよぉ～」
心に、グサリと刺さった。
――・・・デート・・・か・・・。
俺の知らぬ間に、柊とその好きな人の関係が発展していたことに、酷く苦しく感じた。
俺からすると、その人に会いたくないが、何の悪戯か、人目見るくらいなら、と思ってしまった。
そして、柊はふと歩いていた足を速めた。
「お～い！！」
誰かに向かって手を振っている。
――誰だろう・・・？
柊の視線をたどってみる。
すると、誰かが手を振り返していた。
流れるような長い黒髪が、囁くような風に揺れていた。
「お待たせ～！！智実～！！」
「私もさっき来たばっかりだから」
「そっか～」
俺は不意をつかれた。
そう・・・“デート”は男女が遊びに行くことだけでなく、女同士の場合でも言うことがあるのだ。
さっきまで心に纏わりついていたモノが、いとも簡単に解けていった。
安心のため息がこぼれる。
「じゃあ、早く行くわよ。映画始まっちゃう」
「そうだね。じゃあ、レッツゴー！！」
柊が、そう掛け声をかけたその時には、俺はすでに静かな寝息を立てていた。

ふと目が覚める。
ざわざわと声が聞こえてきた。
俺はポシェットからそっと顔を出すと、たくさんの人々が歩いているのが見えた。
柊とクラス委員長の会話が聞こえる。
「面白かったね～」
「んー、私としてはまぁまぁだったかな」
――もう映画を見終わったのか・・・。
何となく後悔していた。
とりあえず、目覚めの欠伸をして、乾いた喉をゴロゴロと鳴らした。
「ん？今なんか聞こえたような・・・」
俺の鳴き声に反応して、クラス委員長がそう言った。
「それはきっと・・・」
柊はポシェットを開いて、俺を見せた。
「クロだよ」
「えっ！？映画館に猫連れて行ったの！？」
クラス委員長は驚いた様子で、柊にそう問いかけると、何の躊躇いもなく「うん」と頷いた。
俺はため息混じりの鳴き声を溢した。
それとちょうど同時に、クラス委員長も深くため息をついた。
すると、クラス委員長はまたも驚いた様子で、今度を俺を見た。
意外にも息が合ってしまったのだから、仕方ないような気もする。
俺はとりあえず、また大きな欠伸をしてから、ポシェットの中で丸くなった。
すると、なぜか鼻がブルッと鳴った。
柊とクラス委員長の笑い声が聞こえてきた。
柊はともかく、あのクールなクラス委員長こと柏木が、声を出して笑うなんて、滅多に見れることではなかった。
どことなく、温かな空気が俺たちを包んでいた。
そんな気がした・・・。

しかし、それはすぐに破られてしまった。
ゴンッ！！
「あっ。す、すいません！！」
「あぁ！？すいませんで済めば、警察いらねぇんだよ！！ゴルァ！！」
最悪なことに、どっかの不良たちに俺たちは絡まれてしまった。
「ちょっと、責任取ってもらわねぇとな～？」
「そうだそうだ。ちょっくら俺たちとどっか付き合えよな！！」
不良の中の一人がそう言うと、柊の腕を無理やり掴もうとした。
すると、クラス委員長がすばやくその手を、バシッと払い落とした。
「っ！？いってぇな、何すんだよ！？」
「それはこっちの台詞よ！！あんたたちこそ、何するつもり！？」
威厳を持って、不良たちにそうクラス委員長は言い放った。
しかし、意外にもあっさり答えを聞く前に、二人がかりで捕まってしまった。
「ちょっと！！放しなさいよ！！」
「いいじゃんかよ。俺たちに付き合えって！！」
そう言って、柊の手を無理やり掴み、グッと引っ張った。
「キャッ！！痛いっ！！」
柊がそう声を上げると、不良たちは声をだして笑い出した。
「『キャッ』だって、可愛いじゃんか～」
「こいつ、結構俺好みかも」
「なぁ、俺たちと付き合えよ？いろいろ面白いこと教えてやっからさ～」
柊は不良たちに、すっかり怯えていた。
――――・・・ブヂッ・・・・！！
俺の中で、怒りの臨界がブチ破れた。
ポシェットから勢いよく飛び出し、柊の腕を掴んでいた不良の顔面を引っ掻いた。
「ギャッ！！」

醜い声を上げ、顔から血を出し、顔をおさえながら倒れ込んだ。
続いて、クラス委員長の右腕を取り押さえていた不良の背中に、爪を立てて飛び乗った。
爪が背中にブスッと刺さる。
「アガッ！！」
そして、そのまま背中を引っ掻きまくる。
その男は声にならならような悲鳴を上げ、そのまま倒れた。
残り一人は、右腕が解放されたクラス委員長の鉄拳によって、一発でノックダウンした。
傷だらけの二人の不良は、最後に気絶した一人を引きずり、情けなく逃げていった。
———俺たちの“陽だまり”には、他のやつは入れさせない！！
クラス委員長は立ち上がると、腰を落としている柊のそばまでやってきた。
「美琴！！大丈夫！？」
「う、うん。何とか」
柊は、クラス委員長の差し出す手を取り、ゆっくりと立ち上がった。
ふとクラス委員長は、俺のほうに視線を落とした。
そして、一言言った。
「あんた、結構やるじゃない」
———いや、お前に言われたくない・・・。
と思ったが、とりあえず返事した。
立ち上がった柊は、俺をゆっくりと抱き上げ、ぎゅっと抱きしめた。
「ありがと、クロ」
少し照れくさかった。
でも、とても温かかった。
俺はこの“陽だまり”を、失いたくなかった。
ふと、あの夢を思い出した。
すると、温もりが胸をチクリと突いてきた。

・・・なぜだろう・・・。

・・・嬉しいはずなのに・・・。

・・・どうして、こんなに苦しくて・・・辛くて・・・怖いのだろうか・・・。

3day:【陽だまり】（後書き）

今回、ほんの少しの戦闘シーンについて。
「なんで猫が不良相手に戦えてるんだよ?」って、ツっこみたくなるのはわかりますが、まぁ気にしないでください^^;

?day:【醒めない夢】

・・・“夢”・・・夢を見ている。

それは朝陽を忘れた夢。

夜が明けることのない・・・いつまでも醒(さ)めない夢・・・。

～＊～＊～＊～＊～

大切な人がそばにいた。

私の手をギュッと握ぎりしめている。

彼の温もりが、手から伝わってきて、とても温かかった。

でも、なぜか悲しそう・・・。

手に涙が落ちた。

【・・・大丈夫だよ・・・大丈夫だから泣かないで・・・】

そう言ってあげたかった。

でも、声が出ない。

二人だけの四角い部屋の中、とても静かだった。

静寂な空気が漂っている。

できることなら、大切な人と一緒に泣きたかった。

でも、涙も流せない。

虚ろな瞳が、ただ空気を見つめていた。

“あの時”から、もうどれくらいの時間が経ったんだろう。

四季の風に誘われて、時間は少しずつ流れていく。

・・・春・・・。

【まだほんのり冷える風に、温かな陽射しが心地いい季節】

・・・夏・・・。

【雪の冷たさを忘れ、傘からのぞきこむ青空が透きとおる季節】

・・・秋・・・・。

【少し涼しくなり、紅葉が辺り一面に舞い落ちる季節】

・・・冬・・・・。

【雪の訪れを告げ、街が白一色に染まる季節】

誰もが、流れる景色の中を生きている。

なのに、私だけ止まった景色を眺めていた。

この四角い部屋の中で・・・ただ一人・・・・。

でも、待ってくれる人がいた。

【・・・これで目が覚めて、最初に目が合うのは・・・きっと、きみだね・・・】

～＊～＊～＊～＊～

・・・夢・・・夢を見ている。

黒い猫さんが、ウチを足元から見上げている。

可愛らしい瞳が見えた。

でも、その奥に深く哀しい何かが映っているような気がした。

ゆっくりと抱き上げた。

それに合わせて、ゴロゴロとこぼれる鳴き声が、とても愛らしかった。

ギュッと抱きしめてあげる。

とても温かかった。

でも、この温もりが、愛らしさが、夢なのかと思うと、すごく怖かった。

いつになれば、この夢は醒めてくれるのか。

ウチは、いつまでも夢の中を、彷徨い続けていた。

〜＊〜＊〜＊〜＊〜

朝陽に誘われて、眩しい陽射しに目が覚める。
ウチは、ゆっくりと体を起こし、「うぅーっ」と背伸びをした。
ふと、視線を落とすと、一匹の黒猫が寝息をたてていた。
ウチは小声で呟いた。
「おはよ、クロ」
そう言って、そっと黒い毛並みを優しく撫でてあげた。
すると、クロはゴロゴロと満足そうに喉を鳴らした。
ウチは、返事してくれるクロが大好きだった。
でも、ウチの大切な人じゃない。
ウチのそばに、きみはいない。
少し寂しい気はしたけど、こうして夢から醒めたことに、ホッと一安心した。
ふと時計に視線を移す。
いつもより少し早く起きてしまった。
まだ、目覚まし時計が鳴っていない。
ウチは、それが鳴る前に止めた。
クロが起きちゃうからね。
立ち上がり、制服に着替え始めた。
そして、朝食をつくって、食べて、その頃にクロが起きてきて、足元にやってきて、頭を撫でてあげる。
時間が迫ってくると、かばんを持って、またクロがそばにいてくれて、靴を履いて、家を出た。
「行ってきま〜す」
ウチの声に続いて、クロが鳴き声を家に響かせる。
そして、家を後にした。
こうして始まるクロが加わったウチの毎日。
毎日が楽しいこの生活に、ウチは満足していた。

・・・でも・・・ほんの少しだけ不安だった・・・。

4day:【クロとお見舞い】

ドタバタドタバタ。
朝から何やら慌しい。
俺は、騒音にたたき起こされ、目を覚ました。
―――うっさいな・・・。
大きな欠伸をして、何事かと辺りを見回す。
なぜか、柊は走り回っている。
「どうしよっかな～？何着て行けばいいんだろ～？」
―――いつもどおりでいいじゃん・・・ってか、どこへ行くつもりだ？
俺は冷めた眼差しで、彼女を見つめていた。
ふと、柊は一着の服を持って、俺の方を向いて立ち止まった。
「ねぇ、クロ～。これどうかな？」
―――・・・似合ってる・・・。
なぜか、彼女を見ているのが恥ずかしくなり、俺は背を向けた。
すると、柊は頬を膨らませてぼやいた。
「もぅ・・・そっぽ向かなくてもいいのに・・・もういいよっ！これ着てくもんっ！」
―――いや、そういうつもりじゃないけど・・・それを着てくれ・・・。
俺が背を向けてる間に、柊は着替えを済ませ、お気に入りのポシェットを肩にかけ、俺の今の名前を呼んだ。
「クロ。おいで～」
振り向くと、とても可愛らしい少女がいた。
それは反則的なまでに似合っていた。
俺は、彼女にまた声をかけてもらうまで、硬直していた。
「・・・クロ？どうしたの？」
そこで、彼女に見とれていた俺の意識がはっきりした。

慌てて彼女の足元まで歩いていくと、いつものように俺を抱き上げ、ポシェットの中に入れてくれた。
そして、玄関で靴を履き、家を出た。

俺は揺れるポシェットから顔だけ出して、流れる景色を眺めるのが好きだった。
微かに冷える朝の風に、射しこむ朝陽が暖かかった。
突然、柊は俺に話しかけてきた。
「ねぇ、クロ？これから、ウチらはどこに行くんだと思う？」
いつもどおり、俺はゴロゴロと鳴いて、返事をする。
柊はそれに対し、嬉しそうに答えてくれた。
「今日はね、黒澤くんのお見舞いに行くんだよ～。って、誰だかわかんないよね」
・・・“黒澤（くろさわ）”・・・。
あやふやな記憶の中に、確かにこの言葉は存在した。
しばらく聞いていなかったその“名前”に、俺はふと懐かしく思う。
「何かね、黒澤くんが学校を休んだんだよ。風邪らしいんだけど・・・何か気になっちゃって」
――・・・柊・・・俺を心配してくれてんのか・・・。
彼女は「えへへ」と薄ら笑いを浮かべている。
思わず、鳴き声がこぼれた。
そして、俺の家が見えてきた。
柊は見えるや否や、すぐさま走り出した。
そして、俺の家の前で「とうちゃ～っく！！」と小さくジャンプした。
突然走り出し、更にジャンプまでするものだから、ポシェットの中で俺はいろいろと大変なことになっていた。
――め、目が回った・・・。

顔をブルッと振るい、ひょこっと顔をだした。
すると、彼女はインターホンを押すことなく、玄関の扉に手を掛けていた。
そして、勢いよく扉を開けた。
「こんにちは～！！お見舞いに来たよ～！！」
―――おいおい・・・。
彼女の突発的な行動に驚くところだが、なぜか家の中はとても静かだった。
狭い家の中を、彼女の明るい声がわずかに響いていた。
そういえば、柊曰く、“俺”は風邪で寝込んでいるらしいが、俺はこうして“クロ”になっている。
じゃあ、風邪で寝込んでいる“俺”って、一体誰のことだ？
俺がそんなことをポシェットの中で考えていると、柊は突然靴を脱いで、家にあがり込んだ。
「お邪魔しま～す！！」
―――ちょ・・・おい・・・。
と、聞こえない声で呟いていると、俺の部屋へと向かっていった。
ポシェットがまた揺れる。
そして、俺の部屋に前までやってきた。
コンコンッ。
「いるよね？開けちゃうよ～」
そして、ついに明らかになった“俺”。
そこには・・・。

「・・・あれ？ここ、だよね・・・」
その部屋には、誰もいなかった。
それに、いないだけでなく、何もかも無くなっていた。
“俺”という存在が、消えていた。

俺はポシェットから降りて、部屋中を見回した。
―――・・・どう・・・して・・・。
一瞬、俺は動揺してしまったが、よく考えてみれば当たり前だった。
“黒澤　陵”はもういない。
いるのは、“クロ”という黒猫。
でも、これが果たして当たり前なのか？
俺の中で、もどかしい何かが渦巻いているようで、気分が悪くなった。
柊のポシェットに戻ろうと振り返ると、柊は床に座りこんで俯いていた。
―――どうしたんだ・・・？
近くまで歩いていき、下からのぞきこむと、あの明るい柊の顔から笑顔は消えていた。
動揺していて、微かに聞こえた声が震えていた。
「引越しちゃったのかな・・・だから、あの時・・・・・・“あの時”？」
柊は突然、何かを思い出したように顔を上げた。
そして、ゆっくりと立ち上がる。
「・・・あの時は・・・そう・・・確か、好きな人の話をしてて、黒澤くんが急に走りだして・・・それで・・・」
柊の言葉が、そこで途切れる。
俺は彼女の言っている意味が、よくわからなかった。
―――突然・・・何を言いだすんだ？
柊は少しの間、黙り込んでいた。
そして、再び口を開いた。
「・・・嘘、だよ・・・」
そう言うと、突然、彼女はポシェットを床に置いたまま、家を飛び出した。
俺はすぐさま、柊の後ろについていった。

柊は、俺ん家から学校へ向かう道を、必死に走っていた。
その後ろを、猫の脚力を利用して、ちゃんとついていく。
そして、ある地点で立ち止まった。
そこは、学校の校門の前にある十字路だった。
柊は道の端でしゃがむと、突然必死に何かを探し始めた。
俺は、横から彼女の様子を伺っていた。
すると、柊は何かを手で拾い上げた。
「・・・これ・・・失くしてたストラップ・・・」
ここで、俺はようやく一安心した。
――――な、何だよ・・・ストラップか・・・心配させるなよ・・・。
俺は小さなため息をついた。
そして、いつものように彼女に声をかけてあげようとした、その時だった。
「！！！嘘だよっ！！！」
突然、彼女は大声を出した。
その迫力に、俺の小さな鳴き声は、胸の奥に抑え込められてしまった。
「だって、ウチ・・・ここにいるよっ！！なのに・・・なのに、どうしてっ！！」
柊はストラップを胸に当てて、そのまま泣き出した。
「嘘だよっ！！こんなの絶対に嘘だよっ！！！」
彼女の叫び声と泣き声が混ざり、この十字路に轟いていた。
しばらく彼女は、この場で泣き崩れていた。

5day:【消えた少女】

暖かな朝陽が、俺の意識を目覚めさせる。
ゆっくりと目を開き、辺りを見回す。
ここはいつもどおりの柊の部屋。
可愛らしいぬいぐるみや、少女漫画やらが並んでいる。
そう・・・いつもと変わらない風景のはずだった。
この部屋は、たった一つの欠陥を持っていたから。
―――柊が・・・あいつがいない！？
俺はすぐさま、四本足で立ち上がり、家中を探した。
しかし、彼女はいなかった。
ふと、柊の言っていた昨晩の言葉が甦る・・・。

～＊～＊～＊～＊～

柊はしばらく泣き叫んだ後、泣きつかれたのか、瞳にほんのりと雫を残し、笑顔を見せた。
そして、一言。
「・・・帰ろっか、クロ？」
俺は黙って柊の足に体を擦りつけた。
何が彼女に起きたのか、俺にはわからない。
今の俺は、柊の涙を拭ってやることも、励ましの言葉をかけてやることもできない。

でも、そばにいることならできる。
俺は多分、このために“クロ”になったんだと思う。
柊のそばにいつまでもいられるように、俺の願いを叶えるために“クロ”になったんだ。
それを実感した今、俺が彼女のためにしてあげられることは、柊のそばにいてあげることだけ。
俺は柊に抱かれて、家に帰った。

家に帰り、夜のことだった。
「・・・ねぇ、クロ？ウチの好きな人、知ってる？」
俺は嫌になり、ゴロゴロと鳴きながら首を振った。
――・・・その話は聞きたくない。
そう思っていた俺に、彼女ははっきりと告げた。
「ウチね・・・黒澤くんのことが好きだったんだ」
柊の言葉が、俺の鼓動を高鳴らせた。
俺は彼女の突然の告白に、息を呑んだ。
「鈍感でぶっきら棒で、でもそんなところがちょっぴり可愛かったりして・・・あと、普段めんどくさがりなのに、友達のために一生懸命になってくれる。そんな黒澤くんが大好きだった」
そこで、柊は顔を伏せる。
「でも、ウチは全然素直になれなくて、ウソまでついちゃって、そのせいで嫌われちゃって・・・」
――違うっ！！俺はお前のことが・・・。
ここで心の声が詰まった。
俺の今の声は、柊には届かない。
突然、静かになった気がした。
「・・・クロ、ごめんね・・・もしかしたら、夜は明けないかもしれないんだ・・・」

よく意味がわからなかった。
思わず首を傾げる。
その仕草を見た柊は、クスッと笑った。
「わかんないよね？・・・ごめんね、本当に・・・」
そう俺に謝ると、俺の黒い毛を撫で始めた。
「・・・おやすみ・・・クロ・・・」
俺はゴロゴロと喉を鳴らし、返事をした。
そして、そのまま俺は眠った。
意識が薄れる間際、柊は最後にこう言った気がした。
「・・・じゃあね・・・」
その声は、微かな意識の中、静かに闇の中へと溶けていった。

～＊～＊～＊～＊～

俺は彼女のいそうな場所を、手当たり次第に探し回った。
校門前、校舎、校門前の十字路、クラス委員長と待ち合わせていた場所、映画館・・・。
でも、柊はどこにもいなかった。
――・・・柊・・・どこにいる・・・！？
俺は町中を走り回っていた。
柊を見つけ出すために・・・。
ふと、俺に声をかけてきたやつがいた。
『アンタ・・・さっきから何走り回ってんだヨ』
エリーだった。

『探してるやつがいるんだ』
俺はとりあえず、こいつに見かけたか尋ねてみた。
しかし・・・。
『柊？きいた名だけど、見かけないネ』
『・・・そうか・・・』
俺はエリーに礼を言うと、この場から走り去った。
もしかしたら、すれ違いになったのかもしれない。
そう思い、俺はさっき探した場所を、もう一度探すことにした。

・・・ハァ・・・ハァ・・・。
さすがに息が切れてきた。
俺は三周ほど走り回ったが、結局柊は見つからなかった。
――・・・どうすりゃいい・・・俺は・・・？
頭が真っ白になった。
結局、何もできなかった・・・そばにいることすら、俺はできなかった・・・。
――俺は・・・もう・・・。
絶望の暗闇を漂っていたその時だった。
『諦めんのは、まだ早いヨ！！』
声がした。
また、エリーがきた。
『・・・何だよ・・・？』
俺は俯きながら、そう訊きかえす。
すると、フッと鼻で笑い、エリーは俺を見た。
『この町には、探していない施設がたくさんあるダロ？あのデカい病院に行ってみなヨ』
彼女の言葉に、俺は顔を上げる。
『・・・病院？どうしてそんなとこ？』

『ナメんなヨ？アタイらを誰だと思ってんダイ？徹底的に調べたのサ』
よくわかんないが、何かわかったらしい。
とりあえず、俺は彼女に礼を言った。
『何かわかんないけど、サンキューな。でも、どうしてそんなとこに・・・』
『それは、自分の目で確かめナ』
俺は頷き、病院へと駆けていった。
エリーはそんな俺を、ふと呼び止めた。
『待ちナっ！！』
俺は立ち止まり、振り返る。
『どんな辛いことがあっても、折れんじゃないヨ』
『わかってるよっ！！』
俺は、柊のもとへと走り出した。

俺は走り続けた。
人ごみを駆け抜け、蹴り飛ばされぬよう、足を上手く避けながら、必死に走り続けた。
この時、俺の頭は真っ白だった。
ただでさえ、走った後なのに、これほど走っていれば、もう何も考えられない。
頭の中には、ただ【柊　美琴】の名だけが、浮かび上がっていた。
そして、ついに見えてきた。
俺は、病院の自動ドアの前で立ち止まった。
窓を探した。しかし、どこも開いていなかった。
仕方なく、俺は自動ドアが開くのを待った。
そして、人が通れば、すぐさま入る。
ようやく、病院の中に入り込めた。

俺は病室の名札を見て、彼女の知り合いらしき名を探し回った。
――――・・・ここじゃない・・・ここでもない・・・。
なかなか見つからない。
流石にこの病院は広かった。
それに、もう過ぎてしまったかもしれない。
そんな時だった。
ある名札が、俺の目に止まった。
【柊　美琴】
俺は立ち止まり、息を呑んだ。
意味がわからなかった。
病室のドアが、少しだけ開いていたので、前足で体が通れるまで開いた。
そして、中に入った。
ふと、前に見た“夢”を思い出した。
なぜなら、それと同じ光景が、目の前に映っていたから。
この光景を、俺はただ唖然と見つめていた。
俺の意識が、この部屋に取り込まれそうになる。
この光景を眺めている間、全ての“時間”が止まっていた。
俺の中にある、記憶が少しずつ甦ってきた。
――――そうだ・・・“あの時”・・・。

・・・そう・・・俺は昔から、流れる“景色”が好きだった・・・。
・・・止まっていた時間(けしき)が・・・少しずつ流れ始めた・・・。

Ｆｉｎａｌｅ：【記憶のかけら】

暖かな陽射しが、俺の体を温めていた。
それに誘われ、少しずつ意識がはっきりとしてきた俺は、伏せていた顔をゆっくりと上げた。
病院の一室に、俺はいた。
ベッドに向き合う椅子に腰を下ろし、俺はベッドに伏せて眠っていたようだ。
顔を上げた視線の先には、一人の少女が寝息をたてていた。
一緒にバカみたいに笑いあっていた頃、ショートヘアーだった茶色の髪は、数年かけて長く伸び、窓から入ってくる風とともに静かに揺れていた。
名前は【柊（ひいらぎ）　美琴（みこと）】。
彼女は、高校生だった頃から、今に至るまで、“ずっと眠り続けている”。
柊がこうなってしまった“あの時”のことは、今でも忘れない・・・。

～＊～＊～＊～＊～

「それは・・・相談に乗ってほしいからなの」
俺たちが高校生だった頃、そう言われて俺はショックを受けて、その場から逃げ出した。

「あっ、ちょっと待ってよ〜！！」
柊は、走り出した俺の後を追いかけてきた。
「ねぇ、黒澤くんっ！！待ってってばっ！！」
その時、校門の前の十字路で悲劇が起きた。
「待って、って言って―――」
キィィィイイイイっ！！！！！
俺を追いかける柊は、横から走ったきたトラックに気づかず、そのまま・・・。
トラックの運転手は慌てて降りてきて、柊に駆け寄った。
「大丈夫か、きみっ！？しっかりっ！！」
柊は薄れていく意識の中、走り去ってゆく俺の背中を見つめていた。
「・・・くろ・・・さわ・・・くん・・・」
辺りには、手に持っていたかばんの中身が、飛び散っていた。
そして、たくさんの通りすがりの人々や生徒たちが集まってきた。
「誰かっ！！救急車をっ！！」
集まってきた人の一人が、急いで電話をかけた。
人ごみを掻き分け、柏木がそばに駆け寄る。
「美琴っ！！しっかりして、美琴っ！！」
「・・・と・・・もみ・・・？」
柊は擦れた声で、呼び返した。
柏木は彼女の手を取り、必死に声をかけた。
「もうすぐ救急車が来るからねっ！？だから、もう少しだけ頑張ってっ！！」
「・・・か、ばんの・・・す、スト・・・ラップが・・・」
「そんなのいいからっ！！」
「・・・でも・・・で・・・も・・・」
電柱に向かって、柊は手を伸ばした。
その方に柏木は視線を向ける。
そこには、柏木が柊と一緒に作った手作りストラップが落ちていた。
柏木はそれを手に取ろうとした。

その時、救急車のサイレンが聞こえてきた。
やっと来たのだ。
その後、柏木は柊を助けることで頭が一杯になり、そのことを忘れてしまった。
柊は救急車で、この病院に運ばれていった。

俺はその頃、部屋で寝ていた。
柊が事故にあったことなど知らず、自分のことばかり考えていた。
俺は柊のそばにいられない・・・そんなことばかり考えていた。
そこに電話がかかってきた。
「・・・はい、もしもし」
「私っ!!智実だけどっ!!」
柏木からだった。
慌てた様子で、話していた。
「・・・で、何か用?」
「陵っ、大変なのっ!!美琴がっ・・・美琴が事故にあったのっ!!」
「っ!?」
俺は病院に、すぐさま走って行った。
病院の入り口で、柏木が俺を待っていた。
ここで、俺は柏木に事情を聞かされる。
俺は頭が真っ白になった。
彼女が走っていたのは、俺を追いかけていたからだ。
俺のせいだ。
俺のせいで、柊は事故にあった。
・・・俺の・・・せいで・・・。
俺たちは集中治療室の前で、柊を硝子越しに見守っていた。
そして、医者の一人が告げた。

「今のところは、まだ何も言えません。ですが、一応すぐ連絡できる場所にはいてください」
俺たちは黙り込んでいた。
何も言えなかった。
ある時、柏木は口を開いた。
「私はとりあえず、家に帰ろうと思う。家ならここから近いし、連絡してくれればすぐ来れるから・・・陵はこれからどうするの？」
「俺は、ここに残る」
柏木はそれを聞くと、頷いてから「じゃあ、またね」と家へ帰った。
そして、次の日、柊は病室を移された。

～＊～＊～＊～＊～

そして、柊はこの病室で、長い間、今でも眠り続けている。
柏木や他の友達も、時々見舞いに来ている。
無論、俺は毎日ここに来ていた。
それにしても、俺がここで見ていたあの“夢”は、一体何だったのだろう？
今思うと、可笑しなことばかりだ。
「・・・“クロ”かぁ・・・」
俺はあの時、確かに“クロ”だった。
この記憶に、はっきりと残っている。
きみだけの“クロ”だった。
いつまでも柊のそばにいる“クロ”。

今の“俺”と“クロ”・・・何も変わっていなかった。
俺はふと、目の前の少女に視線を送る。
今も変わらず、俺はこいつのそばにいる。
俺は確かに、こいつから聞いた。
それは夢の中で聞いたことだけど、確かに柊は言ってくれた。
だから、俺はこいつのことを待ち続ける。
いつまでも・・・いつまでも・・・。
俺は眠り続ける少女に、声をかけた。
「・・・俺はいつだって・・・お前のそばにいるからな・・・だから・・・」
ふと、胸の奥底に溜まっていた感情が、溢れてきた。
「・・・だから・・・絶対にまた『おはよう』って・・・俺に笑ってくれよな・・・」
静寂が漂うこの病室で、俺はこぼれてきた雫で手の甲を濡らした。
突然、その病室にノックの音が転がった。
俺は涙を拭い、振り返る。
「ど、どうぞ」
すると、柏木が病室に入ってきた。
「どう？美琴の様子は」
「あぁ、あんま変わんないな」
「そう」
柏木はベッドの横まで歩いてくると、柊の寝顔を見て、クスッと笑う。
「どうしたんだよ？」
「ん？いやね・・・何か美琴・・・」
そう続けて、こう言った。
「―――前にここに来た時より、幸せそうな顔してるな、って思って」
俺は「そうか」と相づちをうつ。
ふと、柏木は呟いた。

「もしかしたら、“幸せな夢”でも見てるのかな？美琴」
「そう、かもな」
俺はふと思い出す。
さっきの“クロの夢”を。
柊にとって、あれで幸せだったのかは、俺にはわからない。
けど、俺は少なくとも、あいつのそばにいれて幸せだった。
あれは“夢”だったけど、とても満たされていた。
俺はさっき、“柊の夢”を見ていた。
そんな気がした。
突然、柏木は俺に手を差し出した。
「これ」
「ん？何だよ、急に？」
渡されたその手には、可愛らしい小さな人形のついたストラップが握られていた。
「あんたから渡してやって。きっと、美琴もそのほうが喜ぶと思うからさ」
俺は黙って、それを受け取った。
「美琴のこと、待ってあげてよね？」
「わかってるよ、そんなこと」
俺はまじめに答えたつもりだった。
しかし、それを柏木はクスッと笑う。
確かに、ちょっと似合わなかったかもしれないが、少しショックだった。
「わ、笑うなよな・・・」
「あっ、ごめんごめん。ちょっと、美琴の飼ってた猫を思い出してね」
俺は首を傾げた。
柊がペットを飼ってるなんて聞いたことなかった。
しかも、いつも嫌われてる“猫”だなんて・・・猫？
俺は柏木に、すぐさま訊きかえした。

「まさか、その猫の名前って・・・？」
「“クロ”っていうの。黒猫のクロ。美琴が事故にあってから、急にいなくなっちゃって」
俺の中の記憶が破片となって、砕け散っていた。
辺りをふわふわと漂い、原型をとどめていなかった。
クロの夢・・・そしてストラップ・・・。
不思議な気分だった。
「どうかした？」
突然、柏木が俺に声をかけてきた。
俺はとりあえず「何でもねぇよ」と、適当に受け流す。
こんなこと、話しても信じてもらえるはずがなかったから。
「じゃあ、私はそろそろ行くね？またね、美琴」
そう柊に声をかけ、俺にも「じゃあ、また」と言った。
「あぁ、またな」
柏木は部屋を後にした。
二人だけ残された病室で、俺は柊に話しかけた。
「なぁ、柊？俺、さっきまで“夢”を見てたよ。黒猫がお前のそばにいてやる夢。お前は今でもそれを見てるかもしんないけど・・・目が覚めたら、また話してやるよ」
ふと、外で猫の鳴き声が聞こえた気がした。
それは、ただの野良猫だったかもしれないし、もしかしたら・・・。
俺は、そっと彼女の手を取り、柏木から受け取ったストラップを握らせた。
そして、窓の外を眺めた。
静かな風が吹き、空に雲が浮いていた。
ふと、小さな鳥が過ぎった。
木が風に揺れて、かさかさと音をたてている。

【・・・俺たちは、流れる“景色”が好きだった・・・】

Later days：【きみのクロ】

「ったく！！今日に限って、何で遅いのよ！？」
「まぁ～、別にいいよ。きっとまた寝坊だろうし・・・だから、智実も落ち着いてよ」
私たちは病室で、大切な人を待っていた。
今、目の前でイライラしている彼女が【柏木（かしわぎ）　智実（ともみ）】。
彼女も大切な友達。
しっかり者で、頼りになる存在。
しかも、力が強くて・・・こういうのをスーパーウーマンって言うのかな？
でも、私のために一生懸命になってくれる親友。
私は可愛らしい人形をその手に握りながら、そんな彼女と一緒に大切な人を待っていた。
ふと、智実が私に問いかける。
「りんご食べる？」
私はすかさず答えた。
「あっ、それなら私が剥くよ。いつも智実にやってもらってるから、今日こそはね」
「じゃあ、お願いするわ」
私は人形をベッドの上に置いてやり、包丁を受け取り、りんごの皮剥きをはじめた。
それを見た智実が、突然声をかけてきた。
「あぁ～あぁ～、それじゃ危ないよ。ここをこう持って・・・」
「う、うん。ごめんね」
すると、智実は「いいのよ」と、笑って答えた。
教えてもらったとおりに、皮剥きをはじめる。
まだ、上手くはできなかったけど、何とか上手く剥けた。
そして、私たちは仲良く、それをおいしくいただいた。

自分で言うのは何だけど、思ったより上手に剥けたな、と少し誇らしくなった。
柏木は私に話しかけてきた。
「のど渇いた？飲み物持ってくるよ」
智実は冷蔵庫から、飲み物を取り出し、手渡してくれた。
そして、なぜか深いため息。
「それにしても、遅いわね。陵のやつはまったく！！」
「まぁまぁ、落ち着いて。どうどう」
「私は牛かっ！？」
そんなやりとりを楽しんでいると、ドアが勢いよくガラッと開いた。
「わりい！！遅れたっ！！」
扉が開くと同時に、勢いよく男の人が入ってきた。
「遅いじゃないのっ！！まさか『寝坊』なんて言わないわよね！？」
すると、彼はいかにも図星というような不器用な仕草を見せてから、
「あ、あはは。寝坊なんだな、これが」と当たり前の如く答えた。
智実は脳天から、勢いよくあの鉄拳を振り下ろした。
ゴツッ！！
見事な音がした。
頭を抑えながら、彼は怒鳴りつけた。
「お、おいっ！！だから、謝ってんじゃないかっ！！」
「だって、遅すぎんのよ。あんたが」
彼は「ハァー」っと、深いため息をついた。
そして、叩かれた頭をボリボリと掻きながら、私の所まで来て挨拶してくれた。
「待たせたな、わりい。寝坊した」
「ううん。そうだと思ってたよ、陵くん」
「そ、そっか」
この人の名前は【黒澤（くろさわ）　陵（りょう）】。
彼は苦笑いを浮かべ、荷物を床に置いて椅子に座った。
そして、ビニールをベッドの上に乗せ、中身を私に見せてくれた。

「ほら、買ってきてやったぞ。これでいいんだろ？」
目の前に出されたものは、私が頼んだものだった。
私が大好きなイチゴのケーキ。
「わぁー！！ありがと！！私、これが食べたかったんだよー！！」
「よかったわね、美琴？」
「うん！！」
智実は私にそう言ってくれた。
私の名前は【柊（ひいらぎ）　美琴（みこと）】。
高校２年生の時から、ずっと私は眠り続けていた。
私の中の時間は、長い間止まっていた。
でも、寂しくなかった。
ずっと、陵くんや智実が、ずっとそばにいてくれたから。
「よしっ！！じゃあ、食うか？」
「そうね。美琴も食べるでしょ？」
「もちろんっ！！」
そう言って、みんなでイチゴのケーキを食べた。
それは、とても甘くておいしかった。

・・・夢・・・夢を見ていた。
長い・・・長い・・・夢を見ていた。
それは、幸せな頃の過去（ゆめ）だった。
私の時間は、そこで止まってしまってから、ずっと同じ景色を見ていた。
それを見ていられるのは嬉しかったけど、私は流れる“景色”が好き。
もう見ることはない景色だと思っていたけど、私を待ってくれる人がいた。
ずっと、そばにいてくれる人がいた。

それは私の大切な人で、大好きな人。
私は嬉しかった。
だから、頑張れた。
だから・・・好きでいられた・・・。

「うん！！ご馳走様でした！！」
「お粗末様でした、と・・・」
「別に、あんたが作ったケーキではないでしょ？」
「わ、悪かったな」
ケーキを食べ終わり、三人でいろんな話をした。
そんな時、ふと何かに気づいた様子で、陵くんが言った。
「お前さ、そういや一人称が変わったよな？」
「あっ、そういえば確かに・・・」
智実も言われて気がついたようだ。
私は嬉しくなった。
「だってほら、もう二十歳なんだし、『ウチ』じゃ変でしょ？だから『私』にしたの」
「まぁ、そりゃそうか」
説明を聞いた陵くんは、あっさりと納得してくれた。
智実も、「ふ～ん」と何となく頷く。
そこで突然、智実は話を切り替えた。
「あんたたち、ちょっと散歩してきなさいよ」
「ん？どうしてだよ？」
すると、笑顔を浮かべながら答えた。
「気分転換よ、気分転換。少し落ち着いて、二人で話してきなさいよ」
智実にそう言われて、言い返す言葉がなかった。
というより、私自身、もしかしたらそうしたかったのかもしれない。

私は、陵くんに視線を送る。
「俺は別にいいけど、柊はいいか？」
「う、うん」
私は人形を手に取り、陵くんに手伝ってもらいながら、車椅子に座る。
少しは歩けるけど、まだ支えてもらわないと歩けない。
私は車椅子にゆっくりと腰を下ろすと、後ろから陵くんが押してくれた。
「じゃあ、行ってくるな」
「行ってくるね」
「はいはい、行ってらっしゃい」
そう言って、智実は手を振ってくれた。
私も振り返して、部屋を後にした。

俺たちは病院の庭を散歩していた。
「ねぇ、陵くん」
突然、柊は俺に声をかけてきた。
「ん？どうした？」
俺はいつも通り、何となく訊きかえした。
すると、微笑みながらこう言った。
「“夢”を見てたんだ」
俺は彼女の言葉を、一瞬にして理解した。
俺は答える。
「そりゃ奇遇だな。俺もだ」
「そういう意味じゃないよ～」
柊は俺が知っていることを知らない。
だから、勘違いしていると思っているのだろう。
彼女は首を横に振った。

でも、俺ははっきりと言ってやる。
「いや、多分あってるよ。俺さ、黒猫の夢を見たんだよ」
「そりゃきぐうだな。おれもだ」
柊が不器用そうに俺の真似をした。
俺は間を入れずに、言ってやる。
「ヘタだな」
「え～！！そんなことないよ～！！今のならきっと、紅白のモノマネにも出られるはずだよ」
「いや、そりゃ無理だな。だって俺、そんな有名じゃないから、誰もわかんないだろ？」
「あ、そっか」
いつの間にやら、モノマネの話題にすりかわっていた。
柊に任せても、多分そのことに一生気がつかないだろうから、俺から話題を戻してやる。
「で、夢の話だけど・・・柊はどんな夢見たんだよ？」
すると、首だけ振り返り、頬を膨らませ俺を見た。
「私だって『陵くん』って呼んでんだから、私のことも『美琴ちゃん』って呼んでよっ」
「わ、わかったけど、せめて呼び捨てにさせてくれ」
俺がそう言うと、「うぅ～」っと少し唸ってから、「まぁ、いっか」と前を向いた。
そして、ひいら・・・美琴は話し始めた。
「私はね、いろんな夢を見たよ。陵くんがずっとそばにいてくれる夢。智実と一緒に遊びに行ったりする夢。あとは、“クロ”の夢とか」
「俺な、夢で“クロ”になってたんだ。お前から、いろんな話を聞かせてもらったよ」
「え、えぇっ！？嘘っ！？じゃ、じゃあ・・・あの時も？」
あの時・・・おそらく夢で、美琴がいなくなる前の晩の時のことだろう。

俺は笑顔で、「あぁ」と答えてやった。
「お前の口から、しっかりと聞かせてもらったよ」
すると、美琴は顔を真っ赤にして、「うぅ～っ」と唸りながら俯いた。
しばらく、沈黙が続いた。
俺はふと足を止め、彼女の正面でしゃがみ込んだ。
彼女はちらっと俺を見ては、すぐに視線をそらす。
それを何回も繰り返していた。
彼女の顔は、どんどん赤くなっていく。
ふと、美琴はゆっくりと口を開いた。
「そ、そこで黙らないでよ・・・」
俺は黙ったまま、美琴の顔を見つめていた。
困ったようで、必死に顔をそらそうとしている。
そんな様子が、ちょっと可愛らしかった。
ふと、美琴は何かを決心したような目で、俺を真っ直ぐ見た。
そして、震えた声を搾り出した。
「え、えっと・・・ちょっと、恥ずかしいから・・・目を瞑って・・・ほしいな・・・」
俺は突然言われ、「あ、あぁ」と言われるままに目を瞑った。
「わ、私も・・・目を瞑るから・・・そのまま・・・」
俺は、言われたとおり目を瞑っていた。
すると、唇に柔らかくて、温かなものが触れた。
俺も目を瞑ったまま、それを受け入れる。
鼓動が高鳴り、耳まで熱くなった。
ゆっくりと唇を離し、目を開くと、真っ赤な美琴の顔が近くにあった。
「え、えっと・・・わた、私っ・・・これでも・・・初めて、なんだょ・・・？」
小さな声で美琴は、そう言った。
俺も高鳴る心臓を抑え、声を絞り出す。

「お、俺だって初めてだっ！」
しばらく、見つめ合っていた。
そして、俺から口を開いた。
「お、俺は美琴が好きだ」
美琴はボーッとしていたのか、突然の俺の言葉にハッと驚いた顔をしていた。
俺は、もう一度口を開きなおし、美琴に答えを求めた。
「お前は・・・俺が好きか？」
すると、美琴は真っ赤な顔を俯かせ、二回、コクッコクッと頷いた。
そして、顔をあげた美琴も、一回唾を飲みこみ口を開いた。
「・・・私も、陵くんが好き・・・だ、大好きっ！！」
美琴は不器用にそう告白をすると、身を乗り出し、しゃがんだ俺に抱きついた。
突然で驚いた俺は、少し間を置いてから、ギュッと抱き返してやる。
すると、彼女の手にも微弱ながら、更に力が加わった。
彼女の長く伸びた茶色の髪の毛を、そっと撫でてやった。
すると、突然唸りだした。
「うぅ～・・・私、猫じゃないんだよ・・・？」
俺は鼻で笑った。
すると、頬を膨らませ、顔を俺の体に埋（うず）めた。
しばらく静かな時間が流れた。
ふと、風が吹いた。
それに合わせて、木がカサカサと音をたてている。
「静かだね」
美琴は俺に呟いた。
「そうだな」
俺はそっと答えてやった。

こうして、どれほどの時間が経っていったのか、俺たちにはわからなかった。
でも、時間は流れている。
これからも、ずっと・・・。
二人で新しい景色を探して、それを一緒に見ていよう。
時間はたっぷりあるのだから。

・・・これからもずっとそばにいる・・・。

・・・俺は・・・【きみのクロ】だから・・・。

〜 fin 〜

Later days：【きみのクロ】（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7487f/

きみのクロ

2011年1月5日02時49分発行